

学士課程教育における自己点検とその改善に関する年次報告書（総評）

生物生産学部

1. 評価結果一覧

自己点検・評価 単位	分析 項目											
	1-1- 1	2-1- 1	2-1- 2	2-2- 1	2-2- 2	3-1- 1	4-1- 1	4-2- 1	4-2- 2	5-1- 1	5-1- 2	5-2- 1
生物生産学部	④	⑤	⑤	④	④	④	④	④	④	④	④	④
水圏統合科学プログラム	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
応用動植物科学プログラム	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
食品科学プログラム	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
分子農学生命科学プログラム	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
国際生物生産学プログラム	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
生物圏環境学プログラム	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
水産生物科学プログラム	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
動物生産科学プログラム	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
食品科学プログラム	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
分子細胞機能学プログラム	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

自己点検・評価 単位	分析 項目 6-1- 1	分析 項目 6-2- 1	分析 項目 6-3- 1	分析 項目 6-3- 2	分析 項目 6-3- 3	分析 項目 6-4- 1	分析 項目 6-4- 2	分析 項目 6-4- 3	分析 項目 6-5- 1	分析 項目 6-6- 1	分析 項目 6-6- 2	分析 項目 6-6- 3
生物生産学部	—	—	—	—	④	—	④	④	—	④	—	④
水圏統合科学 プログラム	④	④	④	—	—	④	—	—	—	—	—	—
応用動植物科 学プログラム	④	④	④	—	—	④	—	—	—	—	—	—
食品科学プロ グラム	⑤	⑤	⑤	—	—	⑤	—	—	—	—	—	—
分子農学生命 科学プログラ ム	④	⑤	⑤	—	—	⑤	—	—	—	—	—	—
国際生物生産 学プログラム	⑤	⑤	④	—	—	④	—	—	—	—	—	—
生物圏環境学 プログラム	⑤	⑤	⑤	⑤	—	⑤	—	—	⑤	—	⑤	—
水産生物科学 プログラム	④	④	④	④	—	④	—	—	④	—	④	—
動物生産科学 プログラム	④	④	④	④	—	④	—	—	④	—	④	—
食品科学プロ グラム	⑤	⑤	⑤	④	—	⑤	—	—	④	—	⑤	—
分子細胞機能 学プログラム	⑤	⑤	⑤	⑤	—	⑤	—	—	⑤	—	⑤	—

自己点検・評価 単位	分析 項目 6-6- 4	分析 項目 6-6- 5	分析 項目 7-1-1	分析 項目 7-1- 2	分析 項目 8-1- 1	分析 項目 8-1- 2
生物生産学部	④	—	⑤	⑤	④	④
水圏統合科学 プログラム	—	—	—	—	—	—
応用動植物科 学プログラム	—	—	—	—	—	—
食品科学プロ グラム	—	—	—	—	—	—
分子農学生命 科学プログラ ム	—	—	—	—	—	—
国際生物生産 学プログラム	—	—	—	—	—	—
生物圏環境学 プログラム	—	⑤	—	—	—	—
水産生物科学 プログラム	—	④	—	—	—	—
動物生産科学 プログラム	—	④	—	—	—	—
食品科学プロ グラム	—	⑤	—	—	—	—
分子細胞機能 学プログラム	—	⑤	—	—	—	—

(⑤十分に適合する ④適合する ③やや適合する ②余り適合しない ①適合しない)

2. 評価結果に対する総評

領域1 教育研究上の基本組織に関する基準

基準1-1 教育研究活動等を展開する上で、必要な運営体制が適切に整備され機能していること

分析項目1-1-1 教授会等が教育活動にかかる重要事項を審議するための必要な活動を行っていること

教育活動に関する長期目標、中期目標・中期計画及び年次計画、学生の受け入れ、学位の授与、教育

課程に関する事項等は、学部執行部が方針を決定し、学部教務委員会で協議したうえで、教授会内規に則り、教授会で審議している。特に教育活動にかかる事項は教授以外の教員にも関わる事項であることから、一部の審議事項を除いて教員会も同時に開催しており、教育に関する情報は適切に構成員に共有する体制を築いている。教務に関する学生及び教員への支援については、支援室（学士課程担当）が対応し、研究に関する教員への支援については、支援室（総務・人事）が対応している。

また、チューター教員は正・副それぞれ1人あたり22～25名程の学生の修学や学生生活に関する相談を受け、指導を行う体制となっている。研究面では3年次後期より始まる卒業論文指導に関して、主指導教員に加えて少なくとも1名以上の副指導教員が指導に当たっている。

領域2 内部質保証に関する基準

基準2-1 内部質保証が有効に機能していること

分析項目2-1-1 自己点検・評価を行う上で必要な情報を体系的、継続的に収集・分析する取り組みを、学部ないしはプログラムにおいて実施し、その取り組みが効果的に機能しているかを検証していること

教育改革推進委員会の実施する各種アンケートの結果に基づいて、各主専攻プログラムの内容が評価される。その評価結果に基づいて教育改革推進委員会から改善の勧告を行っている。それらの改善勧告を受けて、学部執行部が学部教務委員会、入試委員会等と改善策を検討し実施する体制をとっている。

分析項目2-1-2 学生・卒業生を含む関係者から意見を体系的・継続的に収集・分析することを行い、その意見を反映する取り組みを行なっていること

教育改革推進委員会では在学生、卒業生、保護者、企業へアンケートや意見交換会の場を設け、関係者からの意見を収集し分析している。その分析結果に基づいて、学部執行部と各種委員会に改善勧告をおこなっている。改善勧告に対して、各委員会は改善に係る取り組みを実施している。

具体的な成果として、卒業生アンケートでフィールドワークへの評価が高い。そこで、1年次では教養ゼミ+初年次インターンシップにおいて、地域の農業体験を行い、そこで参加者が課題を発見すること、その課題の解決案を地域活動に携わる方々に提案をするものとするすることで、1年生が主体的に学習する大学での学習のスタートが切れるようにしている。さらに、各種アンケートで特色ある教育と評価を受けている附属施設を活用した実習について、いずれの専門プログラムを選択しても履修できるように、プログラム再編を行った。

基準2-2 組織的に、教員の質及び教育研究活動を支援又は補助する者の質を確保し、さらにその維持、向上を図っていること

分析項目2-2-1 成績評価や学生指導について教員会等で情報共有を図り改善していること

各主専攻プログラムで開講している授業科目の成績分布を開示し、教員間で成績評価の整合性を確認している。成績分布に偏りのある科目については、教員からの説明を求め、合意を得て成績評価の決定としている。学部教務委員会から授業改善アンケート結果等に出された意見等をもとに、成績評価や学生指導についての改善案を教員会で報告している。

分析項目 2-2-2 大学、学部、プログラム等において開催される FD 研修会などに参加し、その内容を教員会等で共有して、教育・研究の改善に役立てていること

必要に応じて教育の質の改善・向上のための FD を学部で複数回実施している。

領域 3 情報の公表に関する基準

基準 3-1 教育研究活動に関する情報が、適切に公表されることにより、説明責任が果たされていること

分析項目 3-1-1 学部、学科、プログラム等の目的、入学者受入方針、教育課程の編成・実施方針及び学位授与方針が適切に公表、周知されていること（教職員及び学生含む）

アドミッション・ポリシー（入学者受入方針）は、学生募集要項、ホームページ及び学部案内パンフレットで公表し、入学者選抜（総合型選抜、推薦型選抜、前期入試、後期入試）を行っている。カリキュラム・ポリシー（教育課程の編成・実施方針）及びディプロマポリシー（学位授与方針）は、ホームページ、学生便覧で公表している。学生には、入学時のガイダンスのみでなく、2年次後期のプログラム配属時のガイダンスでもディプロマ・ポリシーとカリキュラム・ポリシーを再度説明している。英語による国際生物生産学プログラムについては、入学者選抜の合格者に募集要項を送付している。

領域 4 施設及び設備並びに学生支援に関する基準

基準 4-1 教育研究組織及び教育課程に対応した施設及び設備が整備され、有効に活用されていること

分析項目 4-1-1 自習室、グループ討議室、情報機器室、教室・教育設備等の授業時間外使用等による自主的学習環境が十分に整備され、効果的に利用されていること

学部内の全講義室に無線 LAN 環境を設置し、平日は授業で使用していない時間と授業時間外は 21 時まで開放し、自習等で使用可能としている。学部 C 棟 2 階ロビーには冷暖房設備とテーブル、いすが設置され、21 時まで自習等が可能となっている。3 年次後期からは年中 24 時間使用可能な実験・研究棟の学生室（個人用ロッカー、共通プリンター、無線 LAN を完備）、ラウンジを整備しており、自主的学習環境は十分に整備されている。

基準 4-2 学生に対して、生活や進路、経済面での援助等に関する相談・助言・支援が行われている

こと

分析項目 4-2-1 学生への履修指導, 学習, 生活面, 経済面等に対する支援が適切に行われていること

生活や進路, 経済面での援助等については, 学生支援室やチューター・指導教員が適宜情報提供と相談・助言・支援を行っているほか, 学期末にはチューター・指導教員が学部生との定期面談を行い, 修得単位の確認をした上での履修指導や学習面, 生活面, 経済面での相談に応じている。また, GPA が 45 未満の学生については, 定期面談での様子等をチューター・指導教員に報告してもらい, 学部教務委員会・支援室で情報共有を行い, 学部全体としてのケアができる仕組みを構築している。

分析項目 4-2-2 障害のある学生, 留学生, その他特別な支援を要する学生に対する生活支援等を行う体制を整え, 実施していること

障害のある学生, 留学生, その他特別な支援を要する学生については, チューター・指導教員, 学生支援室, 学部教務委員会で情報を共有しており, 場合によっては学部執行部とも協議し, 必要な生活支援等を行う体制を整えている。

領域 5 学生の受入に関する基準

基準 5-1 学生の受入が適切に実施されていること

分析項目 5-1-1 入学者受入方針に沿った, 適切な体制により受入が行われていること

光り輝き入試においては, 入学者受入方針に沿ったセミナー及びレポート課題, 面接内容とし, 一般選抜 (後期日程), 外国人留学生選抜 (C 日程) においても, 同様に入学者受入方針に沿った能力を身につけてきた学生を選抜するための面接内容としている。前期試験及び外国人留学生選抜 (B 日程) では, 入学者受入方針に沿った配点としている。

分析項目 5-1-2 入学者受入方針に沿った, 学生の受入が実際に行われているかどうかを検証するための取り組みを行っており, その結果を入学者選抜の改善に役立てていること

入学者選抜実施状況は新年度 4 月開催の学部教授会・教員会で報告され, それを受けて次年度以降の入学者選抜に向けての改善を入試委員会で検討している。また, 前年度の入学者選抜結果を踏まえて募集要項・入学者選抜の実施要項や広報計画は毎年見直しを行っている。

基準 5-2 入学者数が入学定員に対して適正な数となっていること

分析項目 5-2-1 入学者数が入学定員を大幅に超える, または大幅に下回る状況になっていないこと

令和3年度の生物生産学部の入学定員は90名であり、入学者数は94名となっている。また、3年次生編入学試験も行っており、令和3年度は定員10名に対して入学者数が10名となっている。

合格判定の際に定員管理に関する十分な予測と検討を経た上で合格者を決定しており、入学者数は入学定員1.0～1.1倍未満に収まっており、適正な合格者数だったと言える。

領域6 教育課程と学習成果に関する基準

基準6-1 教育課程の編成及び授業科目の内容が、学位授与方針及び教育課程方針に則して、体系的であり相応しい水準であること

分析項目6-1-1 教育課程の編成及び授業科目の内容が、体系性を有しており、授与する学位に相応しい水準となっていること

(水圏統合科学プログラム)

本プログラムのディプロマ・ポリシーとカリキュラム・ポリシーに定められた人材養成目的およびプログラムの到達目標にしたがって、これに必要な講義と実験実習が体系的に構築され、適切な教育組織により実施されている。特に本プログラムの最も特徴的な点は学習の主体性を重視することであり、専門科目56単位の中で必修科目10単位、選択必修科目25単位、選択科目21単位以上修得のように各学生が将来の社会的役割を考慮した上で授業を自由に選択できる。受講科目についてはその内容、適切な受講時期、成績認定の基準が明示されている。

(応用動植物科学プログラム)

陸域における動植物の生産と利用に関する基礎的な知識と技術を体系的に身につけ、関連分野の情勢を広く洞察し、問題解決に取り組むことのできる人材を育成するために必要な、動物と植物の両分野の内容を適切に組み合わせた授業科目を新設しつつ、教育課程を編成し学生に提示するとともに、適切な教育組織により実施されている。コロナ禍で対面授業が制限される中でも、圃場や農場を活用したフィールド体験を含む多様な実験実習に関して、事前に実習方法をオンライン講義で周知させて実施するなど、特徴的な試みが工夫を凝らして行われており、実習成果が得られるように図られている。

(食品科学プログラム)

各授業科目は、ディプロマポリシー・カリキュラムポリシーに則ってシラバスが作成され、シラバスのとおり実施されている。食品分野にかかわる基礎的な講義・実験科目を初め、附属施設である食品製造実験実習棟を利用した食品製造実習(缶詰、水産練り製品、乳製品等の製造実習)、食品工場見学(R3年度は新型コロナ蔓延防止のため、食品工場保有企業の協力のもとオンラインで実施)や食品開発学(食品企業の研究者・技術者が講義を担当)などのより実践的な講義・実習が提供され、食品科学に関する体系的な教育が行われている。

(分子農学生命科学プログラム)

本プログラムでは、生命現象の本質を理解し、修得した体系的な技能・知識を活用できる人材の育成

を目指している。この目的のため、関連分野横断型の講義・実験科目からなる体系的な教育課程を編成し、学生に提供している。各授業科目は、ディプロマポリシー・カリキュラムポリシーに則ってシラバスを作成している。令和3年度後期から研究室に配属されて卒業研究が開始されたので、成果の検証は今後行われる。

（国際生物生産学プログラム）

国際生物生産学プログラムは、2年次前期まではディプロマ・ポリシーおよびカリキュラム・ポリシーにのっとり英語で提供される科目を主としたカリキュラムの提供を行い、各講義科目においては各ポリシーに沿ったシラバスを作成し、シラバス内容に合致した講義を行っている。2年次後期からは、卒論研究の配属を行い、卒論研究に必要な科目を指導教員と協議しながら選択する科目群と英語で提供される生物生産学全般を学ぶ科目群、そして海外の提携校で受講し、習得する科目群から構成されるカリキュラムとなっている。このディプロマ・ポリシーとカリキュラム・ポリシーに合致する個人別カリキュラムを指導教員とのマンツーマンで構成する特徴ある教育を実施している。成績評価については、それぞれの科目においてシラバスに提示し、それに従って成績評価を実施している。特に本プログラムの特色である「英語で学ぶ」講義を教養教育から幅広く履修できるカリキュラムを構築しており、国際人として活躍する人材の養成を行っている。

（生物圏環境学プログラム）

プログラムの特徴である幅広い分野に関連した体系的な講義、演習、実験実習を学生に提供している。陸域の生物生産、水域の生物生産とその生態系の構造、食料生産から消費・廃棄にいたる人間の営みとその社会システムについて学習し、生物圏環境学特論Ⅰ・Ⅱでは外部講師により植物生産や海洋生態についてさらに理解を深める機会を提供している。実験実習では、陸域や水域の生物生産、練習船や圃場、農業生産現場の訪問といったフィールドワークを体験することで、講義で得た知識の活用法を学ぶとともに実践的な知識や技能習得が可能となっている。実践的な技能や知識の習得機会を提供している。

（水産生物科学プログラム）

学部細則に定められた人材養成目的及びプログラムの到達目標にしたがって、これに必要な講義と実習が体系的に構築され、適切な教育組織により実施されている。受講科目についてはその内容、適切な受講時期、成績認定の基準が明示されている。特色ある取り組みであるフィールドワークに関しては、新型コロナウイルスの感染対策への経験的な蓄積がなされており、練習船や水産実験所を利用した実習の機会を前年度以上に確保することができている。

（動物生産科学プログラム）

教育内容と方法（基準2-1, 2-2）、学習成果（基準3-1, 3-2）について、評価・点検した結果、本プログラムの実施状況に問題がないことを確認した。

（食品科学プログラム）

各授業科目は、ディプロマポリシー・カリキュラムポリシーに則ってシラバスが作成され、シラバスのとおり実施されている。食品科学に関する基礎的な講義・実験科目だけでなく、附属施設である食品製造実験実習棟を利用した食品製造実習、食品工場見学（R3年度は新型コロナ蔓延防止のため、食品工場保有企業の協力のもとオンラインで実施）や食品開発学（食品企業の研究者・技術者が講義を担当）

などの実践的な講義・実習が提供され、食品科学に関する体系的な教育が行われている。

(分子細胞機能学プログラム)

本プログラムでは、細胞から生態系にいたる生物・生命科学分野の体系的な技能・知識を学ぶための講義・実験科目を学生に提供している。各授業科目は、ディプロマポリシー・カリキュラムポリシーに則ってシラバスを作成している。さらに、分子細胞機能学特論や生物化学工学など外部講師による集中講義を通じて技能・知識の実践的な活用方法について学ぶ機会を提供している。

基準6-2 学位授与方針及び教育課程方針に則して、適切な授業形態、学習指導法が採用されていること

分析項目6-2-1 教育課程の編成・実施方針に基づいて教育課程が体系的に編成されており、分野の教育に相応しい授業形態や学習指導方法等（研究・論文指導など）が整備され、授業の方法及び内容が学生に対して明示されていること

(水圏統合科学プログラム)

本プログラムのディプロマ・ポリシーとカリキュラム・ポリシーに定められた人材養成目的およびプログラムの到達目標にしたがって、これに必要な講義と実験実習が体系的に構築され、適切な教育組織により実施されている。特に本プログラムの最も特徴的な点は学習の主体性を重視することであり、専門科目56単位の中で必修科目10単位、選択必修科目25単位、選択科目21単位以上修得のように各学生が将来の社会的役割を考慮した上で授業を自由に選択できる。受講科目についてはその内容、適切な受講時期、成績認定の基準が明示されている。

(応用動植物科学プログラム)

陸域における動植物の生産と利用に関する基礎的な知識と技術を体系的に身につけ、問題解決に取り組むことのできる人材を育成するために必要な、動物および植物およびそれらの生産に直接触れる機会を提供する実験実習を新設して、体系的に教育課程を編成し、学生に提示している。そのうえで、3年次後期の研究室配属から、卒業論文の指導及び研究の実施が可能になる体制が構築されている。

(食品科学プログラム)

プログラム詳述書に記されたカリキュラム・ポリシーに従い、食品科学に関連する様々な基礎的または実践的な講義・実験・実習科目が提供され、シラバスを通して授業の方法及び内容の詳細が学生に明確に示されている。これにより学生は食品分野の講義および実習を幅広く基礎から応用まで実践的かつ体系的に受講することが可能である。

(分子農学生命科学プログラム)

生命現象の本質を理解し、修得した体系的な技能・知識を活用できる人材を育成するために、本プログラムでは関連分野横断型の講義・実験科目を提供している。学生に対して、プログラムの教育目標や求められる人材養成目的を学部ホームページ及び学生便覧に掲載するとともに、プログラム配属時のガイダンスにおいて口頭で説明している。また、授業科目ごとにシラバスを作成して、学習内容、到達目標および成績評価基準等を明示している。

(国際生物生産学プログラム)

個々の学生が取り組む卒論研究を実施するために必要な講義科目を指導教員とともに選択し、カリキュラムを構成することで、体系的に専門知識を習得できる教育を行っている。さらに、英語により留学生とともに生物生産学に関する幅広い科目を履修すること、海外提携校で習得する科目群により、広い視野から生物生産学を学ぶという、専門力と教養力の両者を要請するというディプロマ・ポリシーおよびカリキュラム・ポリシーにのっとりたカリキュラムとなっている。これらの特色あるカリキュラムについて、プログラム配属学生と共有するオリエンテーションを各学年で毎年実施している。さらに、卒論指導教員にもディプロマ・ポリシーの説明を配属時に実施している。

(生物圏環境学プログラム)

プログラムの教育目標を学部ホームページ及び学生便覧に掲載し、これに沿って授業科目ごとにシラバスを作成している。各シラバスにおいて成績評価基準を明確に提示しており、それに従って成績評価を適正に行っている。卒業論文についても、シラバスに到達目標や評価基準を明示している。

プログラムの特徴である幅広い分野に関連した講義、演習、実験実習を学生に提供している。実験実習においては、先端的な分析機器を使用したり、練習船や圃場・農場などを利用したフィールドワークを行っている。海外演習や外書講読において語学能力や国際性の向上を図っている。

(水産生物科学プログラム)

学部細則に定められた人材養成目的及びプログラムの到達目標にしたがって、これに必要な講義と実習が体系的に構築され、適切な教育組織により実施されている。受講科目についてはその内容、適切な受講時期、成績認定の基準が明示されている。

(動物生産科学プログラム)

教育内容と方法（基準 2-1, 2-2）、学習成果（基準 3-1, 3-2）について、評価・点検した結果、本プログラムの実施状況に問題がないことを確認した。

(食品科学プログラム)

プログラム詳述書に記されたカリキュラム・ポリシーに従い、食品科学に関連する様々な講義科目が提供され、シラバスを通して授業の方法及び内容の詳細が学生に明確に示されている。これにより学生は食品分野の講義および実習を幅広く実践的・体系的に受講することが可能である。

(分子細胞機能学プログラム)

プログラムの教育目標および人材養成目的を学生便覧・学部ホームページに記載するとともに、プログラム配属時のガイダンスにおいても口頭で説明している。学生が興味のある生物学・生命科学分野を体系的に幅広く学ぶことができるよう教育課程を編成している。プログラム詳述書に沿って授業科目毎にシラバスが作成され、学習内容、到達目標および成績評価基準等を学生に明示している。

基準 6-3 学位授与方針に則して、適切な履修指導、支援が行われていること

分析項目 6-3-1 学生のニーズに応え得る履修指導・学習相談の体制を整備し、助言、支援が行われていること

(水圏統合科学プログラム)

学生からの履修・学習相談に関しては、学生支援室やチューターを通じて相談・助言・支援を行っているほか、年2回の成績開示の時期にチューターが学部生との定期面談を行い、修得単位の確認をした上での履修指導や学習面での相談に応じている。

(応用動植物科学プログラム)

プログラムの配属、研究室の配属の際には、配属先の情報を提供する説明会の実施、配属方法の説明にチューターがかかわっている。年2回の成績開示の時期に合わせて、学生との面談を実施し、学生の相談を受けながら、個々の学生の履修状況を把握しつつ、学生の希望と成績に従って、適切な配属が実現するように配慮している。研究室への配属後は、指導教員が直接、学生の状況を把握しつつ対応する体制が構築されている。

(食品科学プログラム)

プログラム配属後よりプログラム担当のチューターが履修指導および学習相談を行う体制が整備されている。各セメスター終了時に、チューターが学生の単位取得状況と到達度評価を確認し、学習相談や助言等を適切に行っている。研究室配属後（3年次後期）よりその指導・相談体制は主指導・副指導教員が引き継ぐが、必要に応じてチューターがサポートする。4年次生を対象とした学部教育アンケートを実施することで、現教育システムにおける改善可能な事項と学生のニーズを抽出し、対応可能な事項については速やかに実施・改善を行っている。

(分子農学生命科学プログラム)

プログラム配属後から、個々の授業科目で学生の受講状況・成績を定期的に確認し、問題のある学生には授業担当教員が声がけするとともに、チューターが半年ごとに面談してその情報をプログラム内で共有している。3年次後期の研究室配属では、各研究室の研究内容等の説明を聞いてから、学生が実際に研究室を訪問して見学や質問を行ったのち、学生の希望と学業成績を参考にして適切に配属研究室を決めている。研究室配属後は、主指導教員および副指導教員を中心に複数指導体制で学生への指導・助言を実施している。

(国際生物生産学プログラム)

国際生物生産学プログラムは、教養科目の過半数を英語開講科目から履修していることから、その選択について、プログラム担当教員に相談できる体制だけでなく、プログラム内で学年を超えた情報共有を行える仕組みを設置している。また、留学が必須であることから、留学時期の決定などを支援室とプログラム担当教員に相談できるように、定期的にオリエンテーションを実施している。さらに、2年次後期からは、卒論研究配属を行い、留学先での履修科目や実施する研究内容をきめ細かく指導できる体制となっている。

(生物圏環境学プログラム)

研究室配属時には全教員が参加して説明会を実施し、配属方法や卒業論文の指導方針について説明している。配属案の策定にはチューターが関わって、適切な助言と指導を行っている。研究室配属後は複数教員指導体制により卒業論文作成の指導と助言にあたっている。卒業論文の中間発表会、最終発表会をプログラム単位で実施しており、成果の発表、要旨の執筆、質疑応答等の能力を総合的に評価してい

る。最終発表会においては執筆した卒業論文を印刷物完成品として公表することとしており、論文執筆能力も評価している。

(水産生物科学プログラム)

研究室配属後は、主指導・副指導教員が研究室での卒業研究やセミナーを通じて、学生生活や研究などの助言、支援を行っている。卒業論文発表会では、プログラムの教員が質疑応答を通じて研究成果の総合的な指導・助言が可能な体制となっている。

(動物生産科学プログラム)

卒業指導教員ならびに副指導教員が学生の状況を把握しつつ対応する体制が構築されている。

(食品科学プログラム)

プログラム配属後よりプログラム担当のチューターが履修指導および学習相談を行う体制が整備されている。各 Semester 終了時に、チューターが学生の単位取得状況と到達度評価を確認し、学習相談や助言等を適切に行っている。研究室配属後（3年次後期）よりその指導・相談体制は主指導・副指導教員が引き継ぐが、必要に応じてチューターがサポートする。4年次生を対象とした学部教育アンケートを実施することで、現教育システムにおける改善可能な事項と学生のニーズを抽出し、対応可能な事項については速やかに実施・改善を行っている。

(分子細胞機能学プログラム)

プログラム配属後から、個々の授業科目で学生の受講状況・成績を定期的に確認し、問題のある学生には授業担当教員が声をかけるとともに、チューターが半年ごとに面談してその情報をプログラム内で共有している。3年次後期の研究室配属では、各研究室の研究内容等の説明を聞いてから、学生が実際に研究室を訪問して見学や質問を行ったのち、学生間で話し合っ配属研究室を決めている。研究室配属後は、主指導教員および副指導教員を中心に複数指導体制で学生への指導・助言を実施している。

分析項目 6-3-2 社会的・職業的自立を図るために必要な能力を培う取組を実施していること

(水圏統合科学プログラム)

本プログラムの専門教育では、水圏生物や水圏環境に関する「専門科目」を通して、これらを総合的に理解できる能力、および当該分野の「演習」や「実験実習」を通じて、実践的に応用・活用できる技能や姿勢を修得する教育を実施している。選択必修科目の国際漁業学において、実務経験ある教員（水産研究機関の客員教員）による集中講義を実施し、実践的な知識や経験を学ぶ機会を提供している。令和3年度は1-3年生のみの在籍のため、成果については今後検証する。

(応用動植物科学プログラム)

様々な動植物生産分野における実験実習を用意しており、動植物に触れ、その形態や生理機能を実感しつつ、農場実習等で動植物生産のフィールドを体験させ、適切な生産を実現するための、現実的な視点からの学びに向けた考察をさせるようにしている。

(食品科学プログラム)

プログラムが提供する講義や実験実習、研究室セミナー、卒業論文発表会等における議論や発表を通

して、論理的思考力およびプレゼンテーション能力の向上が図られ、併せて食品科学に関する専門知識を基とする実践力、分析力、問題解決能力を身に着けることが可能である。また本プログラムでは、「食品衛生監視員及び食品衛生管理者養成課程」に定める科目の一部を提供しており、所定の科目と単位数を履修することで、卒業時に「食品衛生監視員及び食品衛生管理者任用資格取得証明書」が交付される。

(分子農学生命科学プログラム) 令和3年度は1-3年生のみの在籍のため、成果については今後検証する。

(国際生物生産学プログラム) 令和4年度はプログラム開始から3年が経過し、成果については今後検証する。

(生物圏環境学プログラム)

所属研究室でのセミナーやプログラムでの卒業論文発表会(中間・最終)において論理的思考力やプレゼンテーション能力の向上を図っている。また、プログラムでの教育を社会での実践に生かすため、大学外の複数の国立・県立研究機関や農業法人でのインターンシップの機会を提供している。

(水産生物科学プログラム)

本プログラムの専門教育では、多様な水産生物の生理、病理、生化学、分子、生態、行動、資源等に関する「専門科目」を通して、これらを総体的に理解できる能力、および当該分野の「演習」や「実験実習」を通じて、実践的に応用・活用できる技能や姿勢を修得する教育を実施している。さらに「卒業論文」により、コミュニケーション・プレゼンテーション・実践的外国語能力も含めた総合的な問題解決能力を身につけることが可能となっている。

(動物生産科学プログラム)

様々な動物生産分野における実験実習を用意しており、動物に触れ、その形態や生理機能を実感しつつ、農場実習等で動物生産のフィールドを体験させ、適切な生産を実現するための、現実的な視点からの学びに向けた考察をさせるようにしている。

(食品科学プログラム)

プログラムが提供する講義や実験実習、研究室セミナー、卒業論文発表会等における議論や発表を通して、論理的思考力およびプレゼンテーション能力の向上が図られ、併せて食品科学に関する専門知識を基とする実践力、分析力、問題解決能力を身に着けることが可能である。また本プログラムでは、「食品衛生監視員及び食品衛生管理者養成課程」に定める科目の一部を提供しており、所定の科目と単位数を履修することで、卒業時に「食品衛生監視員及び食品衛生管理者任用資格取得証明書」が交付される。

(分子細胞機能学プログラム)

本プログラムは、大学院進学を経て研究者・技術者を志望する学生が多い。このキャリアパスに必要な、生命科学研究のための「基礎的知識」「実践力」「計画立案力」「発表スキル」を有機的に学べるよう、カリキュラム編成、個々の授業内容(講義・実験)の設定、研究室セミナーおよび卒業研究など研究室活動での指導を行っている。

分析項目6-3-3 障害のある学生、留学生、その他履修上特別な支援を要する学生に対する学習支援を行う体制を整え、実施していること

障害のある学生、留学生、その他特別な支援を要する学生については、チューター・指導教員、プログラム教員会、学生支援室、学部教務委員会で情報を共有し、適宜、必要な学習支援等を行う体制を整えている。

基準6-4 教育課程方針に則して、公正な成績評価が厳格かつ客観的に実施されていること

分析項目6-4-1 分野の教育方針に照らして成績評価や単位認定が実施され、教育分野において有効なものになっていること

(水圏統合科学プログラム)

成績評価基準はシラバスやプログラム詳述書に明記しており、授業科目担当教員からも適宜周知している。各講義の成績評価や単位認定は、担当教員によりシラバスやプログラム詳述書の記載に従って適切に行われている。令和3年度は1-3年生のみの在籍のため、卒業論文については今後検証する。

(応用動植物科学プログラム)

動植物生産について学ぶため、2年次後期の配属以降から、知識を豊かにする授業と、動植物に直接触れ、形態や様々な生理機能を実感できる実験実習を同時並行的に行うよう、分野ごとの授業と実験実習の時間割を配置している。実験実習にあっては、出席とレポートの提出を求めて、成績を評価する。3年次後期から、応用動植物の分野における課題を発見して、その解決策について考察する卒業研究を実施している。

(食品科学プログラム)

プログラムが提供する各講義の成績評価・単位認定は担当教員によりプログラム詳述書・シラバスに則り適切に行われている。

(分子農学生命科学プログラム)

本プログラムのディプロマポリシー・カリキュラムポリシーに則って評価項目と評価基準が設定され、プログラム詳述書・シラバスに沿って適切に成績評価や単位認定が行われている。

(国際生物生産学プログラム)

英語で開講される科目においては、テストのみでなく授業の参加状況を含めた総合的な評価を実施している。留学先で取得した単位については、先方から提示される評価をふまえて、学部の教務委員会で議論し、単位認定を行っている。各専門科目の成績評価については、他プログラムで開講されている講義を活用しており、個々のプログラムで記載されているとおりである。

(生物圏環境学プログラム)

シラバスに記載された教育方針に従った授業が実施され、陸域の生物生産、水域の生物生産とその生態系の構造、食料生産から消費・廃棄にいたる人間の営みとその社会システムについて体系的に学習ができるような講義や実験実習の時間割を作成している。シラバスに記載した成績評価方針は各授業でも学生に周知し、学生の理解度や到達度は期末試験や各回の授業内での小テストやレポート課題により総合的に判断して成績評価と単位認定がなされる。

(水産生物科学プログラム)

成績評価基準はシラバスやプログラム詳述書に明記しており、授業科目担当教員からも適宜周知している。各講義の成績評価や単位認定は、担当教員によりシラバスやプログラム詳述書の記載に従って適切に行われている。卒業論文発表会では、プログラムの教員が質疑応答を行って到達度を確認している。

(動物生産科学プログラム)

動物生産について学ぶため、2年次後期の配属以降から、知識を豊かにする授業と、動物に直接触れ、形態や様々な生理機能を実感できる実験実習を同時並行的に行うよう、育種・生殖・飼養・管理、生体機構等分野ごとの授業と実験実習の時間割を配置している。実験実習にあつては、出席とレポートの提出を求めて、成績を評価する。3年次後期から、動物生産の分野の課題を発見してその解決策について考察する卒業研究を実施している。

(食品科学プログラム)

プログラムが提供する各講義の成績評価・単位認定は担当教員によりプログラム詳述書・シラバスに則り適切に行われている。卒業論文の発表会ではプログラムの教員全員が参加し、質疑応答を行って到達度を相互に確認することで、教育の有効性が担保されている。

(分子細胞機能学プログラム)

本プログラムのディプロマポリシー・カリキュラムポリシーに則って評価項目と評価基準が設定され、プログラム詳述書・シラバスに沿って適切に成績評価や単位認定が行われている。

分析項目 6-4-2 成績評価基準を学生に周知していること

成績評価基準はシラバスに明記しており、授業科目担当教員からも適宜周知している。

分析項目 6-4-3 成績評価基準に則り各授業科目の成績評価や単位認定が厳格かつ客観的に行われていることについて、組織的に確認していること

成績評価に関する疑義や異議申立てがあつた場合は、学部教務委員会と授業担当教員等で検証を行っている。単位認定に関しては、学部教務委員会でシラバス内容を確認の上で協議し、学部教授会・教員会に諮っており、客観的審査のもとで認定を行っていると言える。

基準 6-5 大学等の目的及び学位授与方針に則して、公正な卒業判定が実施されていること

分析項目 6-5-1 学位論文等、卒業認定に係る評価基準が策定され、学生に周知されており、適切な審査体制の下で卒業認定が実施されていること

(水圏統合科学プログラム) 令和3年度は1-3年生のみの在籍のため、成果については今後検証する。

(応用動植物科学プログラム) 令和3年度は1-3年生のみの在籍のため、成果については今後検証する。

(食品科学プログラム) 令和3年度は1-3年生のみの在籍のため、成果については今後検証する。

(分子農学生命科学プログラム) 令和3年度は1-3年生のみの在籍のため、成果については今後検証する。

(国際生物生産学プログラム) 令和3年度は1-3年生のみの在籍のため、成果については今後検証する。

(生物圏環境学プログラム)

卒業論文の成績評価基準はシラバスに記載しており、中間と最終の2回の卒業論文発表会を実施している。卒業要件はシラバスに記載することで学生に周知している。卒業が危ぶまれる学生についてはチューター教員から連絡を取り、Eメールや個別面談により学習指導を行っている。卒業認定に係る最終評価はプログラム会議でプログラム所属教員陣による確認作業を行っている。

(水産生物科学プログラム)

卒業論文の評価基準および卒業要件単位数は学生便覧に明記しており、学生に周知されている。プログラム教員が出席する卒業論文発表会が行われ、プログラム教員会で単位の取得状況を確認して卒業判定原案が作成されている。学部教員会における原案の承認を経て、卒業が認定されている。

(動物生産科学プログラム)

プログラムの教員全員が参加する、卒業論文の計画発表会および成果発表会を実施している。提出された論文をコース教員全員で閲覧する機会を設けた後、卒業判定の会議を行っている。これらの評価方法について、学生全員に周知している。

(食品科学プログラム)

卒業論文においては、評価基準を記したシラバスを策定し、学生に周知されている。指導体制として、主指導教員に加え、副指導教員も研究に関する指導・助言を行う制度を設けており、最終的な評価(成績)は主指導教員と副指導教員とによって判定している。卒業認定はプログラム教員会で審議を行い、学部教授会での審議を経て適切に認定されている。

(分子細胞機能学プログラム)

卒業論文の評価基準は、プログラム詳述書、シラバスおよび学生便覧に記載されており、プログラム配属時のガイダンスにおいて口頭でも説明している。プログラム全教員が参加して卒業論文発表会を開催し、そのときの質疑応答および執筆された卒業論文をもとに主指導教員および副指導教員が複数で評価した認定原案をプログラム会議で確認したのち、学部教授会での審議を経て認定している。

基準6-6 大学等の目的及び学位授与方針に則して、適切な学習成果が得られていること

分析項目6-6-1 進学や就職等の進路の状況から学習成果が認められること

令和3年度卒業生の就職率は92.9%(大学院進学者を除く)であり、昨年度実績(94.2%)と比較して同程度となっている。専門職公務員(地方公務員、農業職、畜産職、水産職など)への就職者が多いことが特徴であり、令和3年度の卒業生は13名が公務員として就職した。この数値は、就職者の3割程度となっている。また、令和3年度卒業生の博士課程前期(修士課程)への進学率は58.8%であり、昨年度実績(53.6%)と比べ、こちらは増加している。

分析項目 6-6-2 教育分野で求められるスキルの伸長度, 卒業や資格取得の状況から学習成果が認められること

令和3年度卒業生のうち63.7%の学生が卒業時に食品衛生監視員及び食品衛生管理者任用資格を取得している。令和3年度卒業生のうち教員免許状の取得者はいなかった。

分析項目 6-6-3 学習の達成度や満足度における学生からの意見聴取の結果, 学習成果が上がっていること

令和3年度の学部4年生に対するアンケートでは、専門教育の授業の満足度100%と、極めて高い評価を得ている。

分析項目 6-6-4 卒業生や進路先における関係者からの意見聴取の結果, 学習成果が認められること

令和3年度に実施した卒業生に対するアンケートでは、専門基礎科目（講義科目）のカリキュラム満足度91.1%、専門基礎科目（専門基礎実験）のカリキュラム満足度93.3%、コース専門科目（講義科目）のカリキュラム満足度100%、コース専門科目（学生実験）のカリキュラム満足度91.1%、卒業論文のカリキュラム満足度88.9%、専門基礎科目（講義科目）が役立っている86.4%、専門基礎科目（専門基礎実験）が役立っている86.4%、コース専門科目（講義科目）が役立っている93.2%、コース専門科目（学生実験）が役立っている91.0%、卒業論文が役立っている95.5%、などいずれも高い評価を得ている。

なお、隔年で進路先の企業にもアンケートを行っており、企業が本学部の卒業生の採用に当たって重視した能力を調査している。特に重視する企業が多かった「コミュニケーション能力」、「チームワーク・協調性」、「問題解決能力」、「論理的思考力」は本学部が推進しているグローバル人材養成計画による留学や、フィールドワーク教育などで学習成果が出ると考えており、今後も推進していく。また、企業アンケートについては、回収率の向上や全学としてアンケートを活用するため、キャリアセンターと協議の上、実施方法の改善を検討する。

分析項目 6-6-5 研究に対する取り組みや研究成果の発表について, 学生の成長を促す仕組みと評価基準が設けられており, 効果（論理的思考, 国際性, 発表力など）における成長が認められること

（水圏統合科学プログラム）令和3年度は1-3年生のみの在籍のため、成果については今後検証する。
（応用動植物科学プログラム）

学生と指導教員のディスカッションをもとに、卒業論文のテーマを決める。さらに学生は、プログラム教員全員が参加する計画発表会に向けて、外国語の論文等から情報を収集し、指導教員とのディスカッションをもとに具体的な計画を立案して、卒業論文の目的にかなった研究方法についての助言を受け

る。令和3年度は1-3年生のみの在籍のため、卒業研究の取組の成果に関しては今後検証する。

(食品科学プログラム) 令和3年度は1-3年生のみの在籍のため、成果については今後検証する。

(分子農学生命科学プログラム) 令和3年度は1-3年生のみの在籍のため、成果については今後検証する。

(国際生物生産学プログラム) 令和3年度は1-3年生のみの在籍のため、成果については今後検証する。

(生物圏環境学プログラム)

配属研究室内で卒業論文研究を実施する際、主指導教員以外にも1~2名の副指導教員による複数教員指導体制下で手厚く指導している。卒業論文研究の成果についてはプログラム内で口頭プレゼンテーションによる中間発表会を実施し、指導教員以外の教員や学生とのオープンディスカッションにより、発表力の改善方法、研究結果の解釈や研究計画の修正を行う機会が与えられる。その後、最終発表会では修正・改善された研究成果を公表できる仕組みが設けられており、学生の成長を促すとともに、成長度合いを含めた評価を行っている。

(水産生物科学プログラム)

卒業研究では主指導・副指導教員が研究に関する指導・助言を行うことで、研究に対する意欲を高めるようにしている。卒業論文発表会にはプログラムの教員が参加し、質疑応答を通じて思考能力やプレゼンテーション能力などの学習成果を確認している。大学院進学を予定している学生には、学会発表を奨励している。

(動物生産科学プログラム)

学生と指導教員のディスカッションをもとに、卒業論文のテーマを決める。さらに学生は、プログラム教員全員が参加する計画発表会に向けて、外国語の論文等から情報を収集し、指導教員とのディスカッションをもとに具体的な計画を立案して、卒業論文の目的にかなった研究方法についての助言を受ける。卒業論文の成果発表会では、得られた結果が示す内容を指導教員と議論し、その成果をプログラム教員全員の前で発表する。これらすべてのプロセスで、学生の成長を促し、プログラム教員全体でその効果を客観的に評価している。

(食品科学プログラム)

卒業研究では主指導教員に加え、副指導教員も研究に関する指導・助言を行う制度を設けており、その効果(成績)も主指導教員と副指導教員とによって判定している。卒業論文発表会にはプログラムの教員全員が参加し、質疑応答を通じて、論理的思考、発表力などの総合的な学習成果を確認している。

(分子細胞機能学プログラム)

外書講読の講義や研究室ゼミでの英語論文紹介を通して、英文読解力を向上させている。卒業研究では、定期的に研究室内で進捗状況を報告して研究推進を図るとともに、プログラム全教員および学生が参加する卒業論文発表会を開催して、研究成果の発表と質疑応答を行い、論理的思考力および発表力を培っている。発表会での質疑応答および執筆された卒業論文をもとに評価を行っている。

領域7 教育の国際性に関する基準

基準 7-1 キャンパスの国際化及びグローバル人材育成の取組が、体系的に行われていること

分析項目 7-1-1 学部、学科、プログラム等において、適切な体制により留学生の受入が行われていること

私費外国人留学生選抜により令和3年度は本学部に1名（韓国1）の私費留学生が入学した。このほか、本学部では毎年 AIMS/PEACE プログラムで特別聴講学生を10名強受け入れており、令和3年度は新型コロナウイルス感染症の流行で渡日はできなかったが7名（インドネシア3、タイ4）の AIMS/PEACE 学生をオンラインで受け入れた。

分析項目 7-1-2 学生への留学プログラム等の周知及び履修指導等の支援が適切に行われていること

本学部ではグローバル人材育成の取り組みとして「グローバル人材養成計画事業」を実施しており、本学部の2-3年生には約2週間、海外の協定大学で行う海外生物生産学演習を提供し、3-4年生には海外協定校であるタイのカセサート大学に1 Semester 派遣する AIMS/PEACE プログラムを提供している。これらのプログラムの周知は My もみじ等で十分に行っており、派遣が決まった後には派遣説明会を複数回行うほか、履修指導等を学生支援室と各プログラム担当教員から適宜実施している。令和3年度の本学部開設の留学プログラムは、新型コロナウイルス感染症の流行のため実施時期は半年ほど延期となったが AIMS/PEACE プログラム学生を4名派遣した。

領域 8 リカレント教育の推進に関する基準

基準 8-1 リカレント教育を推進するための工夫、社会人向けプログラム、初等中等教育との連携や生涯学習の取組が体系的に行われていること

分析項目 8-1-1 リカレント教育の推進に寄与するプログラム(短期プログラムや履修証明プログラム等)が公開されていること

リカレント教育に特化したプログラムは開設していないが、学部開設科目（講義科目）のほぼ全てで科目等履修生の受け入れ可としているほか、社会人向けの公開講座を実施しており、リカレント教育の推進に寄与している。令和3年度は社会人向けの公開講座で43名の受講生の受け入れを行った。また、教員免許更新講習も提供した。

分析項目 8-1-2 社会のニーズを踏まえたプログラムが整備され、適切な指導体制を構築していること

公開講座では受講者アンケート等により得たニーズを踏まえ、毎年、内容を修正・改善している。シラバス等も作成し、内容・指導体制は学部として担保した上で実施している。